

★ 操 作 方 法 ★

ページの上でクリックすると次のページを表示します。右クリックすると前のページに戻ります。

※ Macintosh で、マウスに右クリックの設定をしていない方は、キーボードの「control」キーを押しながらマウスをクリックすると前のページに戻ります。

※ iPad では、上下スクロールでご覧いただけます。

片岡ミカ

プロフィール

片岡ミカ、誕生日・7月20日、血液型・AB型、職業・モデル・フォトグラファー。両親が漫画家（父、かたおか徹治。母、仲尾佳）大叔父に画家の西井義晃という家庭環境の中、幼少から絵を描くのが好きでマンガ家を志望、高校は美術コース。専門学校でグラフィックデザインを学ぶ。デザインの勉強のためと始めた写真の魅力にとりつかれ、2013年より専門学校東京デザイナー学院映像デザイン科にて写真実習の講師をつとめる。



厳しい両親に育てられた少女時代
身のまわりには絵を描く環境が

生まれたのは、北海道の三笠市です。母（仲尾佳）が生まれた場所だったので、里帰り出産で私を産むことになったみたいです。なので、いちおう北海道生まれではあるんですが、育ちは埼玉ですね。私は一人っ子なんですけど、父（かたおか徹治）と母の方針で、一人っ子と思われないように育てられました。

大抵の一人っ子って、一人で可哀想だからと、おもちゃを買って与えられるような感じだと思っんですけど、私の家では全然買ってもらえませんでした。友達の家に行くと、リカちゃんとかバービーちゃんの人形のフルセットがあったりして、いいなあ、羨ましいなあと思うこともありました。なんでうちの親はおもちゃ

とかゲームを買ってくれないんだろうと。

代わりに私が与えられたのは、レゴとか紙粘土、あと大判のカレンダーって裏が白いじゃないですか。あれを壁に貼って、私がどこでも絵が描けるような状態にしてくれました。クレヨンでわーっと殴り書きができるような状態でした。レゴも作り方なんか勝手に勝手に大きな塔を作ったり、紙粘土や砂絵で遊んだりして、物を作ることがすごく得意になって育ちました。今思うと、すごく想像力を掻き立てられるものを与えられていたので、そういう意味で私はすごく幸せだったと思います。

両親はほんと厳しかったです。小さい頃は父が怖くて、しかも怒ると関西弁が混じったりして。たとえば家族でスーパーに行つたときに、びえーんと泣いていたら、父の「泣くな！」の一言でぴたっと泣き止むぐらいでしたから

(笑)。

門限も厳しかったですね。夕方の5時前ぐらいになると、「家に帰ろう」みたいな音楽が町に流れるじゃないですか。それを聞くと「やばい、帰らなきゃ」って、音楽が鳴っている間に自転車かっ飛ばして帰っていました。閉め出されることもけっこうあって、ひたすら玄関の前で開けてくれるのを待ち続けていました。

高校生のとき、家からすぐ近くのマクドナルドでバイトをしていたんですけど、終わるのが夜の9時で、すぐ帰ってこないと店に電話がかかってくるんですよ。私、その社員さんやスタッフさんとすごく仲が良かったので、ずっと喋っちゃってたんです。で、「お父さんから電話だよ」と言われて「すみませんすみません」みたいな(笑)。でも厳しかったのは私が18歳になるまで。義務教育が終わるまでは厳しくしよ



うという両親の方針があったみたいです。もう大人なんだからということ、かなりゆるくなりましたね。



親がマンガ家であること
そしてその娘として成長していくこと

両親がマンガ家で、よその家と違うと気づき始めたのは小学校に上がったぐらいの頃でした。友達の家遊びに行くと、だいたい夕方5時ぐらいから夕飯の用意をするんです。早っ！ と思って(笑)。というのも、うちでは両親とも24時間ずっと家にいるせいか、夜のご飯は早くて9時ぐらいからでしたから。

基本的にずっとマンガを描いていたのは父の方です。母はけっこう仕事が早いので締切をちゃんと守っていたみたいです。父が徹夜で描くのはしょっちゅうだったんですけど、母が徹夜をしているのは見たことはなかったかな。父は遅いですよね、みなさんご存知の通り(笑)。どうも私はその遺伝子を受け継いでいるようで

すけど。

家にはマンガの材料があふれていました。

私、小学校の低学年の頃からトーンナイフで、余ったスクリーントーンをもらって切ってましたね。その頃から肌の一部にトーンがついていくという生活でした(笑)。私の部屋は両親が以前使っていた仕事部屋を開放してもらったものだったの、引き出しを開けるとマンガの道具や原稿用紙がいっぱい出てきたり、当時のマンガ本がたくさんあったりして、紙の量が半端じゃなかったですね。火事になると一瞬で燃えると思いますよ、あれは(笑)。

マンガは自然に描くようになった気がします。おもちゃを買い与えられなかった分、両親がたとえば女の子の顔を描いてくれて、私がトレーシングペーパーを当てて、その上をなぞって描いたりするような遊びもしていました。そ

ういう意味で、多少、両親の影響は受けていると思います。大人になって自分で描いた猫のイラストをグッズにして販売したことがあったんですけど、あの猫のイラストは母親の影響があるかなと思います。父親の影響ですか？ うーん、どうなのでしょう。私、ウルトラマン描けないし(笑)。父がウルトラマンを描いているときは、外にアパートを借りてアシスタントさんと一緒に仕事をしていました。なので、描いている瞬間をリアルタイムではあまり見ていないのかもしれませんが。その頃、私はまだ小さかったのもありますが。

私、中学の頃まで自分はマンガ家になるとずっと思っていました。描いていたのはファンタジー系のマンガです。物語を考えるのも好きで、小学校のときから童話や小説を書いたりしていたので、そういうのもファンタジー系



でしたね。母がショートSFっぽいものを書いていて、その世界観がすごく好きでしたから、影響があったかもしれません。絵的に影響を受けたのは、種村有菜さんの『神風怪盗ジャンヌ』とか、ああいう目の大きい女の子が出てく

るマンガでした。でも、私の描くマンガって、すべて「つづく」なんです(笑)。中学のときはマンガ家になりたいっていう絵のうまい子がいたので、その子と交換マンガみたいなことをしていたんですけど、それも「つづく」(笑)。どうも私って、終わらせるのが苦手というか、最終回って見たくない派なんですよ。終わっちゃうと淋しいじゃないですか。完成できないというのはそういう気持ちがあるのかもしれないです。

人間を描くときのデッサンは父に直してもらったりしていました。でもそれは小学校の頃かなあ。中学になるとあまり両親にマンガを見せてなかったと思います。でもデッサンはしっかりしないとイケないということで、中学のときにデッサン教室に通わせてもらいました。最初は勉強の塾に行っていたんですけど、そこは

厳しい進学塾で、夏休みの講習には「這ってでも来い」とか言われて、「怖っ」と(笑)。そんなの無理無理って、私、進学校に行きたいと思っているわけじゃないし、やっぱり絵を描きたいと。それで中三の秋ぐらいにその進学塾をやめて、デッサン教室に切り替えました。そこは同じような志を持った子がみんな一所懸命描いているので、すごく触発されたというか。あと鉛筆や練りゴムの使い方といったテクニックを教わりつつ、自分のものにしていくことができましたね。でも人物のデッサンがやっぱり苦手で、なかなかうまく描けなかったんですけど、静物のデッサンは好きでした。中学の美術の授業で空き缶をデッサンする課題があつて、そのとき父が飲んでいたモルツの缶をちよつとへこませて描いたら百点でした。あれは父のおかげかも(笑)。



マンガからデザイン、イラスト、
アクセサリー作り、さらにモデル、
そしてフォトグラフィアーに

入った高校は、美術コースがあるところでした。3年間クラス替えなしで、ずっと美術を学ぶコースです。そこでマンガに対する熱がちよつと醒めてしまったんです。実は海外のお菓子とか煙草のパッケージにすごく興味が出て、パッケージデザイナーになりたいと思いはじめました。特に煙草のパッケージにはお洒落なものが多くて、私は全く吸わないのですが、ラークやラッキーストライクの限定パッケージも持っていました。なので高校を出たら専門学校でグラフィックデザインを学ぼうと思いはじめました。

私はどうもやりたいと思うことをすべてやってみたい、というタイプのように、小さい頃から

ら紙粘土で作品を作っていたこともあって、高校を卒業した頃からオーブンで焼くと固まる粘土や、UVライトで作るレジン（樹脂）でアクセサリーを作って販売することを始めました。

あとはファッションショーのモデルをやった



撮影：片岡三果

り。それは高校生の頃、「セブンティーン」に出ているモデルさんを見て、「すごく可愛いなあ」と思っていたんです。それでだんだん「私もこういう風になりたい」と。モデルさんたちってみんなすごく脚が細かったので、その当時は脚磨きというか、ボディメイクに力を注いでいましたね。部屋に寝っ転がって脚を自転車漕ぎみたいな運動もずつとしていました。高校生の頃って思春期ですからちよつと太りやすい時期でもありましたし。それで高校卒業後、ファッションショーのモデルとか、CMに出たり、朝のテレビ番組のコーナーモデルなどをやるようになりました。

ただ、私があまりにもそっちの方向に熱中していたので、両親は「そんなことをやらせるために、美術系の学校に行かせたんじゃない」という感じでした。私、他の子と比べると、反抗

期はほぼなくて温厚に育っていたとは思うんですけど、その中でも反抗はしていたんでしょうね。

今は二人ともすごく応援してくれています。

やみくもにモデルをしたいと言っていた頃は反対されていたんですが、今は意志をしっかりと持ってモデルをしていることや、フォトグラフィアーとして活動したりして、自分を表現する方法にポリシーがあるので、認めてくれたのではないかと。そういえばこのあいだ、フォトグラフィアーとしてトークショーに登壇したんですが、父が見に来てくれました。あと、私がモデルとして出た雑誌をプレゼントするとけっこう喜んでくれますから。

写真は撮るのも撮られるのも大好きです。セルフポートレートも撮りますが、自分で素敵だと思う体と顔のポジションや角度、背景やポー

ジングなどを確認しながら1枚の写真の中に作り込むのは醍醐味がありますね。セルフで撮るといふことは、コンセプトをちゃんと考えて表現しなければいけないので、そのあたりはもっと極めていきたいと思っています。

昔から何かを残すということが好きだったので、写真なりイラストなりを世に残していきたいです。そういう意味では両親とも自分の作品を世に残している仕事をしているわけですから、二人のことはとても尊敬しています。ほんとですよ。もし「尊敬している人は誰ですか？」と聞かれたら、「ウォルト・ディズニーと両親」と答えるぐらいですから。だって自分がやりたいことを仕事にしている人って少ないじゃないですか。かつそれで生活していける人なんて世界中にそんなにいないでしょう。自分もそうなりたいと思っていますし。自分の夢を



仕事にするのを目標に、いろんな作品を世に残してあげたいと思います。

「肩書きは何？」と聞かれるのがいちばん困ります(笑)。以前はタレント活動もしていたの

で、「マルチタレント」と言っていたんですけど、自分のイラストを作品にしていたので、「モデル・アーティスト」と言ってみたり。今は現在は基本的に「モデル・フォトグラフィアー」として活動しています。モデルとフォトグラフィアーの比率は半々ぐらいです。あ、今は東京デザイナー学院で写真の授業を受け持っているんで、教師という肩書きも増えていますね(笑)。

私には夢があるんです。いつか母と一緒に母娘展をやりたいなと。それは私が小さい頃からずっと言っていたことなんです。今はイラストを描く比率は低くなっていますが、描くこと自体はすごく好きなので、いつでも準備ができているというか。まあそこに父が混ざってもいいんですけどね、ついでに(笑)。

今は独立して両親とは離れて暮らしているん



撮影：片岡三果

ですけど、いい距離感というか、24時間ずっと一緒なら喧嘩勃発だと思います(笑)。それでも実家に帰るのは一か月半に一度ぐらい。同年代の子と比べると、かなり頻度は高いと思います。実際に私が親孝行しているかどうかはわからないんですけど、このあいだも母をデイズニーシーに招待しました。父とは野草野鳥観察会が実家近くで開かれたときに一緒に参加したりしています。そのときは私はカメラを持っていろんな野草を撮ったり、採取してみんなで天ぷらやおひたしにして食べたりとか。父にイベントに誘われるとけっこう行く方ですね、私。

高校生ぐらいのときだったら、自分のイベントで親に來られたりすると「なんで來るの？」と思ったりしたかもしれないですけど、今は違います。こっちから誘いますし、來てくれるとすごく安心するんです。娘の成長を見てもらえ

たという気持ちになりますし、私も自分の成長をどんどん見せびらかしたいです。

●インタビューを終えて

まさにマルチな才能を多方面に発揮している片岡ミカさん。肩書きを聞かれると困ると話していました。ミカさん自身が「作品」であることは間違いないでしょう。こんな才能豊かな娘さんをどうやって育てたんですか、とかたおか徹治さんに再度インタビューしたくなつてしまいました（笑）。

文・中島泰司

2015年7月14日

東京・水道橋駅近くの

東京デザイン学院にて



撮影：片岡三果